

再婚の変容

稲葉 昭英
(慶応義塾大学文学部)

【要旨】

2000年以降に生じた家族の変化の特徴のひとつに、再婚者の増加がある。離死別経験者が再婚を経験する確率自体は低下しているが、離婚の増加と初婚の減少によって結婚に占める再婚の比率は上昇している。NFRJ18においても、過去よりも再婚者の占める比率は多い。こうした再婚者の増加に伴い、再婚の意味はどのように変化しているのだろうか。

本研究では、夫婦のどちらか一人が離死別経験者である場合の結婚を再婚と定義し、NFRJ18を用いて結婚満足度・ディストレスについて初婚と再婚で差異がみられるかを検討した。分析の結果、両者に顕著な差異は示されず、性別による差異も検出し得なかった。

一方、NFRJ08を用いて同様な分析を行うと、再婚者の夫をもつ妻に低い結婚満足度、高いディストレスが示された。こうした傾向はNFRJ18においては示されない。

本研究では以上の差異の背後には再婚の質的な変化があると考えている。女性にとって負担が大きくな、あるいは問題の発生が予想されるような再婚は選択されず、また問題が発生した場合には再婚が解消されることで、結果的に初婚との差異が消失したものと思われる。こうした結果は再婚の個人化ともいえるし、再婚における男女の平等化ともいえるだろう。

キーワード：再婚、結婚満足度、メンタルヘルス、ディストレス、初婚

1. 問題設定

本研究では夫婦のうち少なくともどちらか一方が離死別経験者である結婚を再婚と定義し、そうした夫婦によって構成される世帯を再婚世帯と定義する。近年、結婚に占める再婚の割合が高まり、およそ25%が再婚であるとされる。人口動態統計平成29(2017)年度版によれば、2015年時点では全婚姻に占める再婚の割合は27%近い。1960年代までは夫再婚・妻初婚の組み合わせが内訳としては多かったが、近年は夫婦とも再婚が増加傾向にあり、両者の差異はほとんど見られない(稲葉2020)。一方で、離婚経験者の再婚経験率自体は上昇しているわけではなく、むしろ初婚と同様に減少していることが知られている(余田2014; 稲葉2020)。この関係はわかりにくいだが、離婚が増加しているために再婚率は減少傾向にあるものの再婚件数自体は増加傾向にあり、初婚の減少によって結婚全体に占める再婚の割合が高まっていると解釈すべきだろう。

こうした再婚世帯は初婚継続世帯と比較して何らかの差異を示すものなのだろうか。日

本の家族研究では再婚世帯への注目は少なかったため、こうした基礎的な研究はほとんど存在しない。本研究はこうした観点から再婚世帯について記述的な分析を試みる。なお、再婚世帯はステップ世帯であることも多いと考えられるが、後述のように NFRJ18 データではステップ関係を有する世帯は極めて少数であり、ステップ世帯としての分析は限定的な範囲でしかできない。

2. 再婚の態様

表1 性別・年齢階級別にみた婚姻上の地位の分布 (%)

性別	年齢階級	離別 無配偶	死別 無配偶	未 婚	初婚継続	再 婚	合 計
男性	20-34 (n=143)	1.40	0.00	48.95	44.76	4.90	100.00
	35-44 (n=307)	5.21	0.00	29.97	58.31	6.51	100.00
	45-54 (n=369)	5.69	0.00	20.05	66.12	8.13	100.00
	55-64 (n=302)	7.62	1.66	12.91	70.20	7.62	100.00
	65- (n=307))	6.51	1.95	3.91	81.76	5.86	100.00
	合 計 (n=1428)	5.74	0.77	20.10	66.53	6.86	100.00
女性	20-34 (n=169)	3.55	0.00	34.32	54.44	7.69	100.00
	35-44 (n=355)	9.01	0.28	13.80	65.35	11.55	100.00
	45-54 (n=415)	10.36	1.69	11.33	67.47	9.16	100.00
	55-64 (n=337)	9.79	4.75	5.34	74.18	5.93	100.00
	65- (n=324)	7.41	15.12	2.16	68.83	6.48	100.00
	合 計 (n=1600)	8.63	4.56	11.19	67.31	8.31	100.00

まずは、NFRJ18 データを用いて性別・年齢別に各郡人口に占める婚姻上の地位を比較してみよう (表 1)。婚姻上の地位は離別無配偶、死別無配偶、未婚、初婚継続、再婚の 5 カテゴリーの区分を用いるが、NFRJ18 は対象者の年齢の上限が 73 歳ということもあり、高齢の女性を除けば死別無配偶は極めて少ない。

まず、20-34 歳を除けば最頻値は初婚継続で、男性では 65 歳以上の 82%、女性では 55-64 歳の 74%が該当する。20-34 歳は未婚化・晩婚化を反映して男性では未婚が 49%と最頻値をとるが、女性は 34%と次点になっている。さて、離別無配偶世帯は年齢とともに累積的に増加する傾向があるが、男性は 55-64 歳の 7.6%、女性は 45-54 歳の 10.4%がもっとも多い。再婚はこうした離婚の動向を大きく反映すると考えられるが、男性では 45-54 歳の 8.1%、女性は 35-44 歳の 11.6%がもっとも多い。再婚の特徴はもっとも若い 20-34 歳でも男性は 5%近く、女性は 7%以上と少なくないことである。全体で見ると男女ともに有配偶者のうち 6%から 8%強が再婚世帯成員ということになる。

表2は、有配偶者に限定し、かつ再婚世帯を「本人のみ再婚」「配偶者のみ再婚」「夫婦とも再婚」に区分した場合の年齢階級別の内訳を示している。なお、参考のためにNFRJ08の初婚継続世帯の比率も提示している。

表2 性別年齢階級別にみた有配偶者に占める再婚分類の分布 (%)

性別	年齢階級	初婚継続	本人再婚	配偶者再婚	夫婦再婚	合計	(NFRJ08 初婚継続)
男性	20-34 (n=71)	90.1	5.6	1.4	2.8	100.0	97.1
	35-44 (n=199)	89.9	2.5	6.5	1.0	100.0	90.4
	45-54 (n=273)	89.4	2.2	4.8	3.7	100.0	88.6
	55-64 (n=235)	90.2	4.7	3.4	1.7	100.0	93.6
	65- (n=268)	93.7	2.6	1.5	2.2	100.0	93.7
	合計 (n=1046)	90.8	3.2	3.7	2.3	100.0	92.2
女性	20-34 (n=105)	87.6	1.0	9.5	1.9	100.0	88.6
	35-44 (n=272)	85.3	5.5	6.3	2.9	100.0	88.1
	45-54 (n=318)	88.1	4.1	6.3	1.6	100.0	92.5
	55-64 (n=270)	92.6	1.9	2.6	3.0	100.0	94.3
	65- (n=244)	91.4	2.0	4.9	1.6	100.0	90.1
	合計 (n=1209)	89.1	3.2	5.5	2.2	100.0	91.2

まず、NFRJ08（最右列）における有配偶者に占める初婚継続世帯の比率と比較すると、それほど大きい差異は見られないが、男女ともに65歳以上の高齢層、男性45-54歳層を除けば、総じてNFRJ18のほうが初婚継続世帯の比率は減少している。

NFRJ18の分布を考察してみよう。男性は35-44歳、45-54歳では「配偶者再婚」が「本人再婚」を上回っているが、それ以外の年齢階級では「本人再婚」が多い。これに対して女性はそのどの年齢階級でも「配偶者再婚」が「本人再婚」を上回っている。度数が少ないため誤差の範囲である可能性もあるが、この結果は整合しない。合計ではどちらも配偶者再婚が本人再婚を上回っており、何らかのセレクションバイアス（自分が再婚している場合に調査に回答しないなど）の存在も否定はできない。

次に、再婚パターンと再婚時の年齢について検討してみよう。表3に再婚パターンを男女で統一し、「夫のみ再婚」「妻のみ再婚」「夫婦再婚」に区分した上で性別に再婚時年齢の内訳を示す。なお、比較のために初婚継続世帯の結婚年齢についても表中に示している。

表3では男性は初婚継続世帯の最頻値が20-29歳であるのに対して、「夫のみ再婚」「妻のみ再婚」では30-39歳、「夫婦再婚」では40-49歳と再婚世帯の結婚時期は顕著に遅くなる。これに対して女性は初婚継続世帯と「夫のみ再婚」では20-29歳、「妻のみ再婚」「夫婦再婚」で30-39歳と、男性に比較して最頻値が早い。性別・再婚パターン別に平均値を示したもの

が図1であるが、男女ともに初婚継続世帯がもっとも結婚年齢が早く、夫婦再婚がもっとも遅い。男性は「夫のみ再婚」「妻のみ再婚」でほとんど結婚年齢差が見られないが、女性は「夫のみ再婚」に比して「妻のみ再婚」のほうが結婚年齢は遅い。

表3 性別再婚パターン別にみた結婚年齢の分布 (%)

性別	年齢階級	初婚継続	夫のみ再婚	妻のみ再婚	夫婦再婚
男性	15-19	0.32	0.00	0.00	0.00
	20-29	68.26	18.75	33.33	4.35
	30-39	29.62	56.25	41.03	30.43
	40-49	1.70	18.75	23.08	39.13
	50-59	0.11	6.25	0.00	13.04
	60-	0.00	0.00	2.56	13.04
	合計	100 (n=942)	100 (n=32)	100 (n=39)	100 (n=23)
女性	15-19	1.60	1.52	0.00	0.00
	20-29	84.23	53.03	13.89	12.50
	30-39	12.96	31.82	69.44	50.00
	40-49	1.13	10.61	13.89	16.67
	50-59	0.09	1.52	0.00	20.83
	60-	0.00	1.52	2.78	0.00
	合計	100 (n=1065)	100 (n=66)	100 (n=36)	100 (n=24)

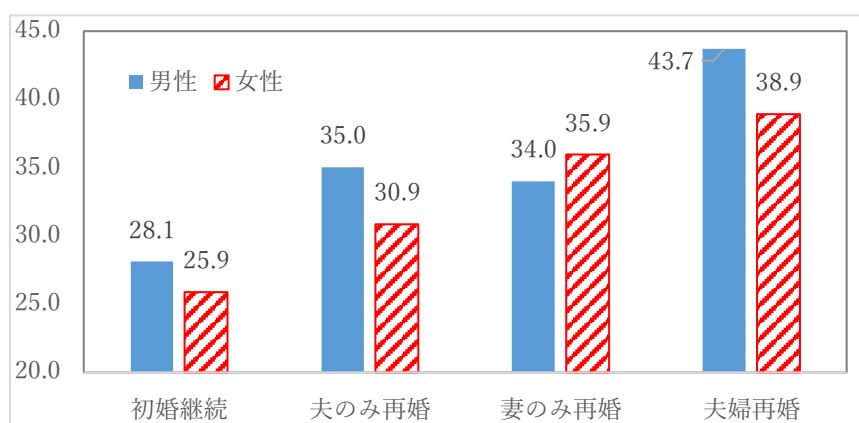


図1 性別・再婚パターン別にみた結婚年齢の平均値

なお、性別と再婚パターンを独立変数として二元配置分散分析を行うと、性別、再婚パ

ターンおよび交互作用すべてに有意な効果が検出される（いずれも $p < .001$ ）。夫婦再婚の場合に結婚年齢は遅くなる傾向がみられるが、全体的には 60 歳以降の高齢期での再婚はまだまだ少ない。再婚世帯の多くは 50 歳未満で発生している。

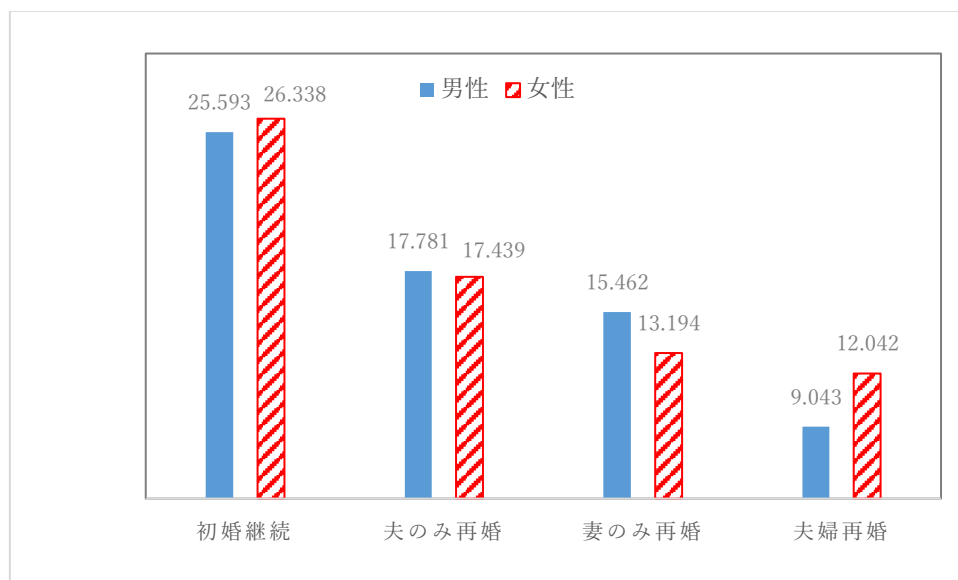


図 2 性別・再婚パターン別にみた結婚期間の平均値

この後結婚満足度などを比較していくが、初婚継続世帯と比較して結婚年齢の差が大きいことに（当然とはいえ）注意が必要である。結婚年齢の差異は、結婚期間の差異とも連動する。図 2 は再婚パターン別に調査時点までの結婚期間の平均値を示したものである。図 2 でもっとも結婚期間が短いのは男性の「夫婦再婚」で 9.0 年、ついで女性の「夫婦再婚」で 12.0 年である。初婚継続世帯とは男性で 15 年強、女性で 14 年強の差があり、再婚パターンによって結婚期間は大きく異なる。

3. 再婚パターンと実子・非実子の有無

NFRJ18 では同居・非同居にかかわらず健在の子どもについて、第 6 子まで実子かどうかを尋ねている。この回答において「養子・継子・里子など」と回答された場合に非実子であるとみなし、表 4 のように子どもの続柄のパターンを再婚パターン別に比較してみた。ただし、ここでいう「非実子」はあくまでも回答者から見ての関係であり、配偶者の実子である場合があること、また「実子」についても同様に配偶者から見て非実子である可能性があることに注意が必要である。

表 4 から、全般的に非実子のパターンが再婚世帯においてもそれほど多いとは言えないこと、再婚世帯でも実子のみで構成されるパターンがおおよそ主流を占めており、実子と非実子の両方を有するパターンは男性の「妻のみ再婚」「夫婦再婚」で高まるが総じて少

ないこと、非実子のみのパターンが総じて少ないことがわかる。男性は有配偶者 1,046 名中非実子を持つケースは 17 名にとどまっており、「非実子のみ」はうち 3 名のみである。女性は 1209 名中非実子を持つケースは 13 名、「非実子のみ」はうち 6 名であった。

表 4 性別・再婚パターン別に見た子どもの分布 (%)

		実子のみ	実子+非実子	非実子のみ	子なし	合計
男性	初婚継続(n=950)	89.4	0.1	0.1	10.4	100
	夫のみ再婚(n=33)	78.8	0.0	0.0	21.2	100
	妻のみ再婚(n=39)	51.3	15.4	5.1	28.2	100
	夫婦再婚(n=24)	45.8	29.2	0.0	25.0	100
	合計(n=1046)	86.6	1.3	0.3	11.8	100
女性	初婚継続(n=1077)	89.5	0.1	0.2	10.2	100
	夫のみ再婚(n=66)	72.7	4.5	3.0	19.7	100
	妻のみ再婚(n=39)	84.6	2.6	2.6	10.3	100
	夫婦再婚(n=27)	66.7	7.4	3.7	22.2	100
	合計(n=1209)	87.9	0.6	0.5	11.0	100

表 5 離死別経験者の再婚パターン別再婚時の子どもの有無

		再婚パターン	あり	無回答
男性		夫のみ再婚(n=33)	42.4	6.1
		夫婦再婚(n=24)	29.2	0.0
		合計(n=57)	36.8	3.5
女性		妻のみ再婚(n=39)	38.5	0.0
		夫婦再婚(n=27)	37.0	0.0
		合計(n=66)	37.9	0.0

非実子は養子の場合もあるため必ずしもステップ関係であることを意味しない。また、既述のように回答者と実子関係にあっても、配偶者とは非実子関係である場合も存在する。後者の点について、離死別経験者については離死別時点での子どもの有無（年齢階級も尋ねている）が測定されているため、再婚している場合にはステップ関係の存在を推定することができる。表 5 はこの結果を示したものである。

男性は「夫のみ再婚」で 42.4%、「夫婦再婚」で 29.2%に離婚時に子どもがいたと回答している。しかしながら表 4 の妻の回答した「夫のみ再婚」では非実子は 7.5%、「夫婦再婚」では 11.1%にとどまっており、離婚後に父子が同居して新しい母と再婚するパターンは少ないことがわかる。一方女性は「妻のみ再婚」で 38.5%、「夫婦再婚」で 37.0%に離

婚時に子どもがいたと回答しているが、表4で夫が回答した「妻のみ再婚」では非実子ありが20.5%、同様に「夫婦再婚」で29.2%と、度数が少ないとはいえ、ここでも差異は大きい。夫再婚時よりも妻再婚時にステップ関係の比率が高まることは、離婚後の親権を母親がとることが多い現状を考えればごく妥当な結果ではあるが、離婚時の子どもの存在を尋ねる項目では回答の数値が概して高く、再婚時（現時点）の非実子についての回答はこれに比して低いことは、夫妻いずれかとの実子関係がある場合に回答者が「実子」と判断している可能性もあるように思われる。「実子か非実子か」という問い方でステップ関係が正しく測定できるのかどうか、今後検討が必要に思われる。

いずれにせよ、「非実子」の存在によってステップ関係をとらえようとする、該当する世帯のサンプルサイズは小さいことが明らかになり、計量的な分析は非常に難しいと言わざるを得ない。

4. 再婚と結婚満足度

それでは、再婚パターンと夫婦関係および家族関係の態様について検討してみよう。まずは基本となる結婚満足度の検討から始めたい。これまでの結婚満足度研究では、結婚満足度は女性より男性に高いこと、新婚期に高く、その後第一子の出生とともに満足度が低下し、子どもが離家する頃にまた上昇するというU字型カーブを描くことが指摘されている（稲葉 2004）。このパターンについては批判もあり、横断的データの結果に過ぎないという指摘もあるが、多くのデータでこのパターンが確認されていること、縦断的データを用いてもU字の後半の上昇が少ないという結果が主たる相違点であり、このパターン自体を否定する必要はあまりないように思われる。

まずは結婚満足度（「夫婦関係全体について」の満足度、「かなり満足」から「かなり不満」、までの4段階）の度数分布についてNFRJ08（2009年実施）の結果との比較を行いたい。年齢や結婚年数を統制していないため、大まかな比較にすぎないが、NFRJ08と比較するとNFRJ18では「かなり満足」が全体の3割と増加し、不満が減少している傾向がみられる。全体を初婚継続世帯と再婚世帯に分割した結果では、両者の間に大きな差異は見られないが、再婚世帯のほうが「かなり満足」「かなり不満」どちらも多く、分散が大きい印象を与える。

結婚年数の経過と性別によって結婚満足度は大きく異なることが知られている。NFRJ18について、結婚満足度を従属変数とし、性別、結婚期間（9年以下、10-19年、20-29年、30-39年、40年以上）、再婚世帯（再婚は夫婦のどちらか1人以上が再婚、レファレンスは初婚継続世帯）の3変数を独立変数として3元配置の一般線形モデルを適用すると、結婚期間の主効果（ $F(4,2099)=11.35, p<.001$ ）、再婚世帯の主効果（ $F(1,2099)=9.31, p<.01$ ）および結婚期間と再婚世帯の交互作用効果（ $F(4,2099)=4.93, p<.001$ ）に有意な効果が示されたが、性別の主効果および交互作用効果は有意な値を示さなかった。性別・結婚年数別・再

婚世帯/初婚継続世帯別の結婚満足度の推定周辺平均を図3に示す（得点が高いほど満足度が高いことを意味する）。

表6 NFRJ08 および NFRJ18 の結婚満足度の分布（%）

	NFRJ08	NFRJ18 (全体)	NFRJ18 (初婚継続)	NFRJ18 (再婚)
かなり満足	23.3	29.7	29.5	32.0
どちらかといえば満足	58.2	54.3	54.8	49.8
どちらかといえば不満	13.3	11.6	11.4	12.8
かなり不満	5.2	4.4	4.3	5.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
n	3873	2137	1918	219

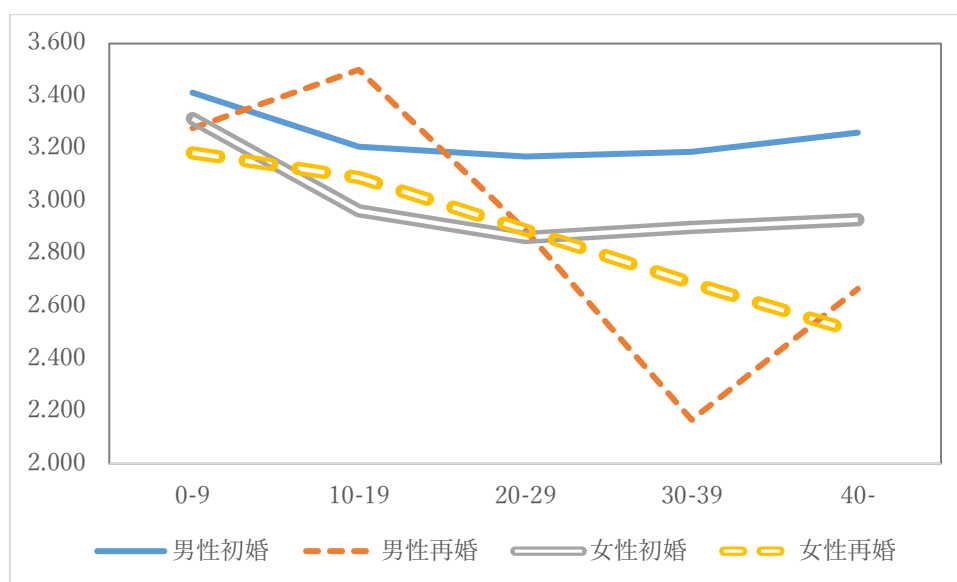


図3 性別・結婚期間別・再婚世帯/初婚継続世帯別結婚満足度(NFRJ18)

図3から明らかなように、再婚世帯は結婚9年以内、10-19年では初婚継続世帯と同等ないしはそれ以上に満足度が高いが、30年以降の落ち込みが著しい。少なくとも、近年の満足度において初婚継続世帯との間に大きな差異は見られないが、結婚30年以上になると差異が大きい。まったく同じ分析をNFRJ08について行ってみた結果が図4である。

図4と図3を比較すると、男性初婚継続、女性初婚継続のパターン自体はいずれも類似しているが、図4（NFRJ08）で大きかった結婚満足度の男女差が図3（NFRJ18）では小さくなっており、統計的な有意性も存在しなくなっている。再婚についてはNFRJ18のほうが結婚期間別の差異が大きく、男女ともに結婚30年以降で満足度が顕著に低い。

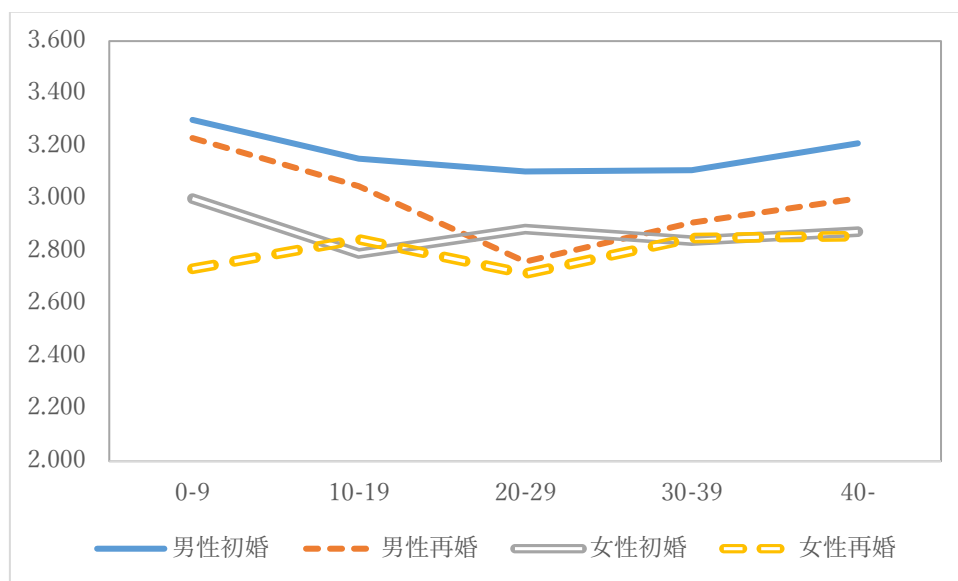


図4 性別・結婚期間別・初婚再婚別結婚満足度(NFRJ08)

それではNFRJ18について、統制変数を用いたうえでいくつかの仮説の検証を行ってみよう。検証対象となる仮説は以下の2つである。

(1)再婚は男性の結婚満足度を高めるが、女性の満足度は低める。

(2)ステップ関係が存在する場合に結婚満足度が低い。

(1)はNFRJ98を用いた稲葉(2002)などで指摘されているもので、男性は初婚でも再婚でも配偶者の存在はメンタルヘルスの良好さと関連するが、女性は再婚の場合かえって(無配偶者以上に)メンタルヘルスの悪化と関連するという知見に対応する。ただしNFRJ98では本人の再婚は同定できるが、配偶者が再婚かどうかは同定できず、この知見は(世帯レベルではなく)個人レベルでの再婚に関する知見であることに注意が必要である。ここではまず、結婚満足度についてこの点を検討してみよう。

(2)は(1)とも関連するが、親子間にステップ関係が存在する場合に家族関係上の問題が生じやすく、このことがストレスとなることが良く知られている。

(1)は本来は男女を合併したデータで、再婚と性別の交互作用を検討することで結論を求めることができるが、ここでは夫再婚・妻再婚をダミー変数で設定し、男女別々に同じモデルを適用し、確認のために性別の交互作用に言及する。

統制変数は、結婚満足度に関する先行研究にならい、回答者年齢、世帯年収(万円単位のカテゴリーの中間値を用いる、ただし係数の解釈を容易にするために単位を100で割り、100万円単位とする)、夫学歴・妻学歴(それぞれ短大卒以上=1、中卒・高卒・専門学校卒=0としたダミー変数)、結婚期間(年数、解釈を容易にするために単位を10年とする)、結婚期間2乗(10年単位の結婚期間の2乗)、実子ありダミー、非実子ありダミー、夫再婚ダミー、妻再婚ダミーを投入する。推定はOLSによる。この結果を表7に示す

表7ではモデルに交互作用を投入した結果は割愛している。これは非実子あり×夫再婚、非実子あり×妻再婚、などの交互作用に有意な効果が示されなかったからである。男性の結果は統制変数として投入した年齢、妻大卒ダミー、結婚期間2乗、の各変数に有意な効果が示され、同様に女性の結果は世帯年収、結婚期間、結婚期間2乗に有意な効果が示された。変数の関連は、年齢が若いほど、世帯年収が高いほど、妻が大卒であるほど、結婚期間が短いほど、結婚期間2乗が長いほど、結婚満足度は高い。世帯年収、妻学歴、結婚期間の効果は先行研究での知見と整合的である。また、結婚期間2乗は結婚期間が長くなると結婚期間の負の効果が鈍化することを意味しており、いわゆるU字型パターンに対応する。

表7 NFRJ18、性別にみた結婚満足度に対する再婚および非実子の効果 (OLS)

独立変数	男性		女性	
	B	SE	B	SE
切片	3.928	0.197	3.572	0.228
年齢	-0.013 *	0.005	-0.009	0.006
世帯年収	-0.004	0.007	0.022 **	0.008
夫大卒(=1)	0.075	0.051	0.070	0.057
妻大卒(=1)	0.148 **	0.053	0.063	0.059
結婚期間	-0.135	0.087	-0.287 **	0.094
結婚期間 ²	0.048 ***	0.015	0.063 ***	0.014
実子あり(=1)	-0.106	0.078	-0.155	0.086
非実子あり(=1)	-0.157	0.211	-0.080	0.235
夫再婚(=1)	-0.113	0.116	0.067	0.100
妻再婚(=1)	0.158	0.117	0.055	0.127
R ²	0.042 ***		0.053 ***	
Adj R ²	0.032		0.032	
n	911		984	

*p<.05 ** p<.01 ***p<.001

さて肝心の再婚の効果は夫再婚、妻再婚、および両者の交互作用（結果は割愛）いずれも男女どちらにおいても有意ではなかった。同様に非実子および非実子×夫再婚、非実子×妻再婚の効果も男女ともに有意ではなかった。また、男女を合併して性別×本人再婚、性別×配偶者再婚、性別×非実子の交互作用を検討したがいずれも有意な結果は得られなかった。(1)(2)2つの仮説はいずれも支持されなかったことになる。初婚継続世帯と再婚世

帯に結婚満足度の顕著な差異は見られず、また非実子の効果も結婚満足度に影響を与えるとは言えない。

表 8 NFRJ18、ディストレスに対する再婚および非実子の効果 (OLS)

独立変数	男性		女性	
	B	SE	B	SE
切片	1.874	0.131	1.624	0.136
年齢	-0.008 *	0.003	-0.001	0.004
世帯年収	-0.010 *	0.005	-0.005	0.005
夫大卒(=1)	0.069 *	0.034	0.019	0.035
妻大卒(=1)	0.015	0.036	-0.024	0.036
結婚期間	0.034	0.058	-0.021	0.057
結婚期間 ²	0.002	0.010	0.002	0.009
実子あり(=1)	-0.094	0.052	-0.014	0.053
非実子あり(=1)	0.162	0.140	0.164	0.142
夫再婚(=1)	0.098	0.076	0.020	0.060
妻再婚(=1)	-0.051	0.082	0.049	0.076
R ²	0.028 **		0.009	
Adj R ²	0.016		0.000	
N	856		993	

*p<.05 ** p<.01 ***p<.001

同じモデルで結婚満足度をディストレス（12個の質問項目のうち、逆転項目1個を除外した11項目の平均値、得点が高いほど心身の状態が悪い）に変えて行った分析結果が表8である。ここでも夫再婚、妻再婚および非実子、非実子×夫再婚、非実子×妻再婚の有意な効果は男女いずれにおいても示されない（交互作用を入れないモデルの結果は割愛）。以上の結果からすると、NFRJ18では夫婦関係について初婚と再婚で大きな差異は見いだせないということになる。もっとも、既述のように再婚は結婚期間が長期の場合に低い満足度が示されており、かつては初婚と再婚の差が大きかったのに対して、近年では差が小さくなっているということなのかもしれない。最後にこの点について検討する。

5. 再婚の時点間変化

NFRJ08 を用いて表 7 とほぼ同じモデルによる回帰分析 (OLS) を結婚満足度に対して適用してみた。この結果が表 9 である。ただし、NFRJ08 では子どもが実子か非実子かは識別できないため、これらの変数については子どもの有無をダミー変数で測定したもので代替する。その意味では完全に同一のモデルではない。

まず、男性の結果は夫大卒、結婚期間、結婚期間 2 乗に有意な効果が示された。夫が大卒であるほど、結婚期間が短いほど、結婚期間 2 乗が長いほど、結婚満足度は高まる。少なくとも、結婚期間の効果は NFRJ18 と同様である。大きな違いは女性の結果で、世帯年収、夫再婚に有意な効果が示された。世帯年収が高いほど満足度は高まるが、夫が再婚の場合に結婚満足度は低下する。

表 9 と同じモデルで NFRJ08 のディストレスを従属変数とした推定結果を表 10 に示す。表 10 でも再婚関連の変数の効果は女性にのみ示され、夫が再婚の場合にディストレスが高まることがわかる。NFRJ98 で指摘された、女性本人の再婚とディストレスとの関連ではなく、配偶者である夫が再婚である場合に女性にディストレスが高いという結果ではあるが、女性において再婚世帯と初婚継続世帯の間に差異が見出されたことになる。

なお、表 9 で夫再婚×妻再婚、子どもあり×夫再婚、子どもあり×妻再婚の 3 つの交互作用を検討したが、いずれも有意な効果は示されなかった。ところが、ディストレスについては女性において子どもあり×夫再婚、に有意な効果が示された。このため、この結果のみ表 10 の model2 に示す。

表 10 model2 で示された子どもあり×夫再婚の交互作用を、それぞれの主効果と同時に解釈すると、夫が再婚の場合に女性のディストレスは高くなるが、子どもがいる場合にはその効果は弱まることを意味している。NFRJ08 では子どもが実子かどうかは判断できず、この解釈についてはここでは保留したい。ただし、こうした効果が NFRJ18 では示されないことを鑑みると、再婚が初婚に比してさまざまな問題を伴う状態からそうでなくなった、という変化が背後に存在するということなのかもしれない。

以上、NFRJ08 の分析結果からは、夫再婚、妻初婚の場合に妻の結婚満足度が低く、ディストレスが高いという結果が示された。限られた分析ではあるが、NFRJ98 や NFRJ08 で示された「女性における再婚世帯のメンタルヘルス上の不利」が NFRJ18 では見られなくなっており、再婚の質的な変化をその背後に想定することができるように思われる。

離婚経験者が再婚する確率自体は低下しているが、このことは初婚と同様に「再婚を選択しない」という選択可能性が高まっていることと対応しているとも考えられる。つまり、再婚が自身に有益でないと判断されれば、再婚は選択されず、あるいは解消される。この結果として個人にとってメリットが大きな再婚が観察されやすくなる、というセレクション効果が生じた結果として初婚との差異が消失したのではないか、と思われるのである。

表9 NFRJ08、性別にみた結婚満足度に対する再婚および非実子の効果 (OLS)

独立変数	男性		女性	
	B	SE	B	SE
切片	3.375 ***	0.180	3.185 ***	0.215
年齢	0.002	0.005	-0.006	0.006
世帯年収	0.005	0.005	0.020 ***	0.006
夫大卒(=1)	0.139 *	0.062	-0.086	0.064
妻大卒(=1)	0.140	0.086	0.141	0.090
結婚期間	-0.234 **	0.080	-0.085	0.084
結婚期間 ²	0.044 ***	0.014	0.025	0.013
子あり(=1)	-0.112	0.082	-0.176	0.094
夫再婚(=1)	-0.052	0.113	-0.211 *	0.088
妻再婚(=1)	-0.072	0.097	0.075	0.122
R ²	0.027 ***		0.021 ***	
Adj R ²	0.020		0.014	
N	1270		1446	

*p<.05 ** p<.01 ***p<.001

表10 NFRJ08、ディストレスに対する再婚および非実子の効果 (OLS)

	男性		女性 (model1)		女性(model2)	
	B	SE	B	SE	B	SE
切片	1.440 ***	0.103	1.586 ***	0.122	1.570 ***	0.122
年齢	-0.001	0.003	-0.002	0.004	-0.003	0.004
世帯年収	-0.005	0.000	-0.008 *	0.003	-0.008 *	0.003
夫大卒(=1)	-0.035	0.036	0.005	0.037	0.004	0.037
妻大卒(=1)	0.019	0.050	-0.014	0.052	-0.009	0.052
結婚期間	-0.050	0.046	0.036	0.048	0.041	0.048
結婚期間 ²	0.002	0.008	-0.007	0.008	-0.007	0.008
子あり(=1)	0.102 *	0.045	-0.011	0.050	0.025	0.050
夫再婚(=1)	-0.106	0.065	0.177 ***	0.051	0.515 ***	0.051
妻再婚(=1)	-0.073	0.056	0.012	0.070	0.014	0.070
子×夫再婚					-0.371 *	0.161
R ²	0.023 ***		0.016 **		0.016	
Adj R ²	0.016		0.010		0.010	
N	1312		1499		1499	

*p<.05 ** p<.01 ***p<.001

6. 結論

NFRJ18において、再婚者、再婚世帯成員に結婚満足度やメンタルヘルスが悪い傾向は検出し得なかった。その意味で再婚と初婚はこれらの点においてほとんど差異が見られないことになる。こうした傾向は、これまでのNFRJの分析結果とは異なる。NFRJ98やNFRJ08では、とくに女性の再婚経験者や再婚世帯成員に不利が示されていたからである。つまり、女性にとってかつて見られた再婚世帯におけるさまざまなストレスフルな経験が減少し、再婚と初婚がほぼ同様なものとして経験されていることを以上の結果は示唆する。

こうして、本研究は以上のような差異は再婚の質的な変化を背景とするものと結論付けたい。結婚の制度性が後退し、個人の選択の余地が大きくなったように、再婚にもそうした傾向が生まれているのではないか。

もちろん、ステップファミリーに関する諸研究が示唆するように、再婚に伴う複雑な家族関係の発生はとりわけ女性（妻）にとってさまざまな問題を生み出すであろうことは想像に難くない。しかし、NFRJ18の分析の結果はこうした問題の存在を示すことができなかった。これは、こうした問題に再婚者たちがうまく対処している、というよりも、こうした問題が対応可能であると判断されたときにのみ再婚が選択され、あるいは対応可能でない場合に再婚が解消されている結果ではないだろうか。こうした選択が可能になったのは、未婚者であれ離死別無配偶者であれ「結婚しない」という選択肢が従来よりも不利なものではなくなった、すなわち未婚・離死別いずれの無配偶女性においても経済的自立が進み、経済的な理由を主因とする結婚が減少し、「結婚しない」ことを選べるようになった結果ではないかと思われる。こうした結果として、時点間の再婚の質的差異が示された、と本研究は考える。そうであるならば、女性の経済的自立とともに結婚の個人化が再婚にも観察されるようになった結果ではないか、と思われる。

もっとも、本研究では再婚世帯において問題となるステップ関係の影響については十分な分析ができておらず、今後はより詳細な分析をおこなっていく必要があるといえるだろう。

[付記]

本研究はJSPS 科研費 JP17H01006 の助成を受けています。NFRJ18は日本家族社会学会・NFRJ18研究会（研究代表：田淵六郎）が企画・実施した調査で、本研究ではver2.0データを利用しています。また、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから第3回全国家族調査(NFRJ08)の個票データの提供を受けました。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

稲葉昭英, 2002, 「結婚とディストレス」『社会学評論』 53(2):69-84.

———, 2004, 「夫婦関係の発達的变化」 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——NFRJ98 による計量分析』 東京大学出版会, 261-259.

———, 2020, 「離婚・再婚」 田間泰子編『リスク社会の家族変動』 放送大学教育振興会, 173-189.

余田翔平, 2014, 「再婚からみるライフコースの変容」『家族社会学研究』 26(2): 139-150.

Present State of Remarriage and Its Change in Japan

Akihide Inaba

Keio University

One of significant changes among recent families in Japan is increasing remarriage. Although the probability of experiencing remarriage among divorced or widowed individual is declining, the percentage of remarriage in all forms of marriage is increasing due to rising divorce rates and fewer cases of first marriage. We can see these trends in the NFRJ18 data set. Along with the increased rate of remarriage, how is the meaning of remarriage changing in Japan?

We define remarriage as, marriage by at least one person who has been married before. In this study, we explore the difference between first marriage and remarriage regarding marital satisfaction and psychological distress. Through the analyses, we could not find any significant difference between first and remarried couples, nor could we find any significant gender difference in our findings.

However, when doing the same analyses using the NFRJ08 data set, we could find significant low levels of marital satisfaction and high levels of psychological distress among wives whose husbands were remarried. We cannot see these patterns in the NFRJ18 data set.

Considering the differences from NFRJ08 to NFRJ18, we can assume there was a qualitative shift in the state of these remarriages. Women generally do not choose remarriage or will call off remarriage if they experience or predict heavy burden or emerging issues, that is why the gap between first marriage and remarriage is diminished in the NFRJ18 data. It can be said that these results are a kind of individualization of remarriage, or gender equalization of remarriage.

Keywords: remarriage, marital satisfaction, mental health, distress, first marriage